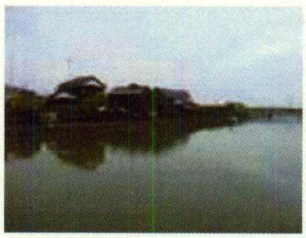
ところで、旧中川邸の庭に巨大な池があることはご存知と思います。

池にしては規模がデカイ。何か意味があるのではと推察した結果が、これは船着場だったのではないかという仮説です。同じような池が、山口県が生んだ8人の総理大臣の一人である萩の田中義一別邸にあります。そっくりではありませんか。ここでは、近くを流れる橋本川から船を引き込んだ痕跡があります。

旧中川邸の池の裏は、かつて海岸線だったといわれていますが、現在も井関川とこの池を結ぶ水路が残っています。

再生工事

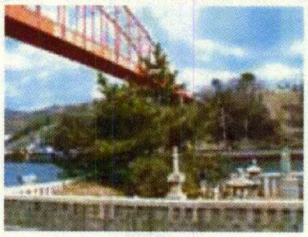
阿知須・旧中川邸・・・水軍の末裔である中川氏は、瀬戸内の島々から多量の石材を運搬することは十分可能であったと考えられる。阿知須の民家の土台は立派な石材で構築されている。



音戸の瀬戸
（中川氏の故郷）

約八百数十年前、平清盛が切り開いたと伝えられている。今は、瀬戸内海航路の要衝ですが、潮の流れが早いため難所としても知られている。昭和36年、真紅の音戸大橋（日本初のアーチ型らせん式高架橋）によって呉市と陸続きになった。

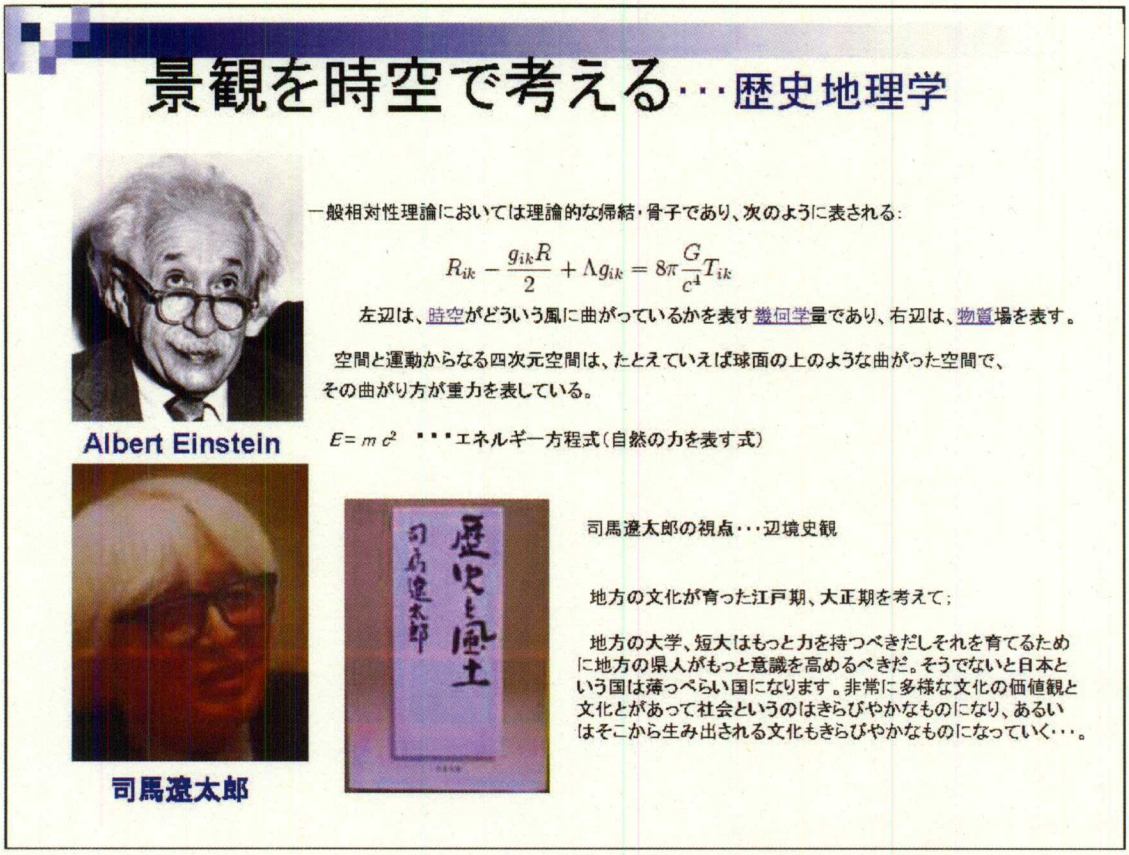
音戸の舟歌
音戸の瀬戸は幅が狭く、昔は、岩があり流れが急で、渦がまいていたので、ここを行き来する船は、潮の流れがゆるむまで待たねばならなかった。この船唄は、瀬戸を通りぬけていく船を見てつくられたようである。全国に三大船唄として紹介され、多くの人に親しまれ、歌いつがれている。



清盛塚
音戸の瀬戸きり開いた平清盛が、人柱の代わりに一字一句の経石を海底に沈め、難工事を完成した。1184年その功徳をたたえ、供養のために清盛塚を建立したとされている。

五勝楼
安芸郡音戸町引地1丁目4番15号
江戸時代の文化文政年間、胡屋太郎平という人は、瀬戸島の庄屋であり酒造りをしていた。

自宅までの物資の輸送に船を利用した中川さんのルーツは、広島・音戸の瀬戸の水軍といわれています。納得ですね。その音戸の瀬戸の写真をHPから紹介します。阿知須浦と非常に良く似た風景ではありませんか。



突然、アインシュタインと司馬遼太郎が登場しました。

アインシュタインは、一般相対性理論で物質場を時空の幾何学量で、運動方程式として表しています。

司馬遼太郎は、歴史と風土から地域の固有な文化を紐解いています。地域の固有の景観は、その地域固有の歴史と風土抜きには語れません。

そこで、歴史地理学的手法で阿知須のまちなみ形成の過程を紐解いて見ました。歴史軸の基準点は阿知須の守護神・北方八幡宮です。八幡宮前には3本の鳥居があり、東の鳥居はセミナーパークの火の山、西の鳥居は東岐波の日の山を向いています。正面の鳥居はかつての参道であり、北方さんかく市、そして道の駅に向かっています。北方八幡宮の東西軸には、防災の守護神・日吉神社、自然神・熊野神社があります。東南東30度の軸線上に恵比寿神社前の井関川岸の石燈篭そしてきららドームがあります。

風土軸は、漁業の守護神・恵比寿神社と石燈篭の軸線です。この軸線の方向は阿知須浦の生活の軸線でもあります。この軸線の西方向には、井関川の源流があります。東方向は、恵比寿神社のふるさとである厳島神社、そして中川氏のふるさと音戸の瀬戸に向かっています。

この歴史軸と風土軸の交点が石燈篭です。石燈篭が阿知須の臍であることがここに証明されました。

以上は、阿知須のまちなみ形成の過程を歴史と風土の面から考えてみたものです。

本日の景観ワークショップでは、皆さんご自身の感性で阿知須の景観をとらえていただきたいと思います。

参考になりますか、どうですか、私の景観のとらえ方は、固有、共有、共生です。

景観をとらえる視点(景観の3原則)

(1)固有･･･地域にぜひ残したいもの、残したくないもの(歴史)

(2)共有･･･皆が共通に心地よいと感じるもの(風土)

(3)共生･･･自然生態系が成立する地産地消のおいしい地域(場所)

例えが悪いかも知れませんが、男女の関係で説明しますと、固有はそれぞれの生まれ持った個性です。それでも付き合うということは、お互いに認め合う共有できる価値観があったからでしょう。その結果、結ばれて家族が営まれます。

このように、景観をとらえる視点として、まとめる手法として参考にしてください。先程の沼田さんのおいしい景観も五感を刺激する素晴らしい視点です。地域固有の様々な景観要素を発掘し、これらの中から共有点を見出し、生活と繋げることの繰り返しから、やがてかけがえのない素晴らしい地域固有の景観が生まれていきます。みんなで楽しみながらじっくり頑張りましょう。門、塀もかつての風情を意識して復元されています。